20260215　朝礼拝　ヘブライ人への手紙 4 章 14～16 節

「やさしいイエス様のお陰」

幼稚園関連の講習会や研修会に行くときには、ちょっと注意すべきことがあります。それは、可能なら早く出かける、ということです。いや、別にギリギリに会場に到着しても別に怒られるわけでもありませんし、何なら多少遅刻しても受付の人は優しく迎え入れてくれます。ただ、ギリギリに到着したり、遅れて行ったり場合、覚悟しないといけないのは、絶対に最前列の席しか空いていない、ということです。これね、もう人の性なんしょうね。いくら大人になっても、先生と呼ばれるお仕事してても、講習会や研修会の席は、必ず後ろから埋まっていきます。それは恥ずかしいからなのか、謙虚だからなのか。よっぽど有名で、サインを求められるくらいの講師や著名人が来るとなれば、ファンの方々がかぶりつきの最前席に座るのでしょうが、普通は、そうはなりません。だから、ちょっとちぐはぐな状況にもなってきます。真面目で意欲的な人ほど早く会場に着きますが、その方々は奥床しく後ろの方で受講することになり、忙しく多分それほどやる気のない人ほど遅く会場に着いて、講師との距離が一番近い席でお話を聞くことになるという。そんな研修会を何度か経験したことがあります。と言うことは、つまり私はそれほど真面目ではない受講者の側ってことですね。まぁ、でも、不真面目な受講者ほど、講師に近い席へ着かざるを得ないというのは、それはそれで理に適った仕組みかも知れません。

これは、ユダヤ教における信仰理解の基本ですが、ユダヤ教の人たちは、特別に優れているから神様の愛を一身に受けることになった、とは言いません。逆に、他のどんな民族よりも小さくて脆弱であるから、神様に愛されていると言います。その信仰理解が、では、現在のユダヤ・イスラエルを巡る状況に、どう影響しているのか、そういう国際関係論的な話はしませんが、大前提として、

ユダヤ教は自らの弱さを自覚した上で、だからこそ神様に愛されている、と基本的には考えているということです。そして、その信仰理解は、キリスト教である私たちにも受け継がれています。私たちは、基本的に、自らの優れた能力や資質があるから、神様に愛されている、とは考えていません。特別な才能を持った人を指して「神様に特別に愛されている」という表現に出会うこともありますが、それは多分正しい理解ではないでしょう。神様は、優れた能力を持った人も、月並みな能力の人も、人より劣った部分を抱えている人も、等しく愛してくださる方です。等しく、それぞれに幸せを備えてくださる方です。そして、教会と言う場所は、能力の高い低いにかかわらず、「こんな私を愛してくれてありがとう」と感謝するところです。もちろん、お金の計算が得意とか、人前で喋るのが苦手とか、讃美歌好きだけど歌は上手じゃないとか、並べたり比べたりしたら、私たちの得手不得手は明確に見て取れるでしょう。でも、そこで遠慮したり、たじろいだりする必要は全く無いと思います。少なくとも教会という場所は、あらゆる人を測る物差しから解放された、そういう意味で、まさに聖域であるべきだと私は考えます。別に、教会に来たら、病気が治るとか、宝くじに当たるとか、そんなことはありませんが、ここに来れば、肩の荷が下りる、少しホッとする、自分に優しくなれる、そういう場所として在ることができれば、多分、神様も喜んでくださるんじゃないかと思います。

今日の聖書箇所は、そういう「教会ってホッとできるよね」という福音を、良き報せを伝えている箇所になります。「大祭司であるイエス様」とは、このヘブライ人への手紙特有の珍しい表現です。この表現でもって言わんとしていることは、イエス様は、私たちと神様を繋ぐ尊い働きを担ってくださっている、ということです。大祭司というお仕事が、神様と人を執り成す、繋ぎ合わせることなので、その大祭司職の最上位にある方として、イエス様のことを説明しているということです。そして、ここからが「大祭司イエス様」の素敵なところです。イエス様は、もちろん神様の御

子であり、私たち人とは異なる方です。でも、だからと言って、私たちの弱さに同情できない方、ではないと言うんですね。これは言ってみれば、優秀過ぎて、できない人の苦しさが分からない、とか、お金持ち過ぎて貧しい人のつらさが分からない、とか、そういうことは全くないよ、と言うことです。15 節にある「罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」。これは、なかなか緊張感のある御言葉で、イエス様は行為や心情において、絶対に悪いことはしていないけれど、私たちが日々感じる誘惑や葛藤については理解されているというのです。神様の御子としての完全性と人としての弱さを破綻することなく同時に持たれているのが、イエス様の凄いところですね。私たちは、そういうイエス様のことを信じているのです。

だから、今さら遠慮して、自分を低く見積もることはしなくてもいいですし、出来ないことや苦手なことを恥じる必要もない。私たちの、そういうダメなところを、憐れみ深いイエス様はよくご存じの上で、その上で、今日も礼拝に招いてくださっている。ここには、あらゆる人間的な評価や言い訳を超えた、イエス様による力強い肯定感があります。「それでいいよ」「そのままであなたは尊いよ」というメッセージがあります。

その信仰的な確信に基づいて、私たちはもっと大胆に恵みの座に近づこうではないか、と誘われています。ここでいう「恵みの座」とは、神様の座っているところ、と解釈して構いません。礼拝堂の講壇の上とか、そういう狭いところの話ではありません。しかし、神様の座っているところに近づくなんて言うと、それは畏れ多いことだし、真面目に考えるほどに現実感が薄れていきます。ただ、私は、今、神様の座っているところの近くで、人生の問題に取り組んでいるとか、夢に向かって励んでいるとか、平和を祈り続けているとか、そんな風に考えてみると、ちょっとだけ元気をもらえるんじゃないかと思います。イエス様に招かれて、私たちは、イエス様と共に、神様の御前で今日も生きている。嫌なことも、不幸なことも起こるかも知れないけど、でも、少なくとも孤独

じゃないし、畏れ多いくらいに素晴らしい方が隣にいてくださる。そう信じることで、日々の足取りがより一層力強く、軽やかになるなら、それは有り難いことです。神様もイエス様も、私たちが今日を幸せに、明日への期待を持って生きられるように、数々の御言葉を語ってくださっています。私たちが御言葉に励まされて、大胆になろうじゃないかと言われて、少しでも心が上向くのであれば、それは神様やイエス様にとっても嬉しいことだと思います。主に栄光を帰す、ってそういうことですよね。

今日から、また新しい 1 週間が始まります。個人的には、教会と幼稚園の 2026 年度のことを色々決めていかないといけないというプレッシャーが増してきますので、少々、気持ちが重たくもなりますが、でも、その弱々しい感情さえイエス様に委ねて、まぁ、神様が良いようにしてくれるだろう、と信じて一個一個取り組んでいきたいと思います。神様を見上げる最前列で、神様が示してくださる希望の出来事を、ご一緒に味わい、そして何か良い事あったなら、心から感謝して参りましょう。主の祝福が豊かにありますように。最後にお祈り致します。

神様。今日も私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。偉大な大祭司であるイエス様は、私たちの能力や立場に関係なく、私たちをあなたの御前に連れて来てくださいました。そして、あたなは、私たちの能力や立場に関係なく、ありのままを愛し、今日の喜びを備えてくださいます。今までに頂いた多くの恵みに感謝しつつ、これから頂くであろうさらに豊かな恵みを大胆に願い求めて、今日から始まる 1 週間も歩んで参りたいと思います。そのように、あなたを見上げつつ、イエス様と共に生きようとする私たち一人一人のことを、どうか御心に留めて愛と祝福で満たしてください。

このお祈りを大切なイエス様の御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。